

## 中井真孝先生古稀・出版祝賀会の挨拶および経歴紹介

二〇一三年一〇月二日(土) ANAクラウンプラザホテル京都

副学長・歴史学部教授 清水 稔

本日はご多忙の中、中井真孝先生の古稀および出版祝賀の会にご臨席いただきまして、誠にありがとうございます。発起人を代表しまして厚く御礼を申し上げます。限られた時間ではございますが、中井真孝先生ご夫妻を囲み、楽しい歓談のひとつとなりますよう祈念しております。また会の運営に当たりましては、不行き届きの点が多々あるかと存じますが、祝宴に免じてお許しいただきますように。それではただ今から中井先生の古稀および出版祝賀の会を開催いたします。

続きまして本祝賀会の主役であります中井真孝先生のご紹介をさせていただきます。

中井先生は、本年五月一日をもちまして、満七〇歳となられ、めでたく古稀をお迎えになりました。現在、先生は、学校法人「佛教教育学園」の理事長として、学園の健全な運営と経営の先頭に立って日夜お仕事をされておられますし、一方では佛教大学嘱託教授として、歴史学部および大学院の教育と研究指導の面においてもご尽力いただいております。また最近、法然上人伝の研究をまとめられた著書『法然上人絵伝の研究』を刊行され、研究にもいつそうの磨きをかけられておられます。

ここで先生が歩んでこられた簡単な道程を紹介いたします。

先生は、一九四三年滋賀県石部町にお生まれになり、膳所高校をへて京都府立大学文家政学部文学科を一九六七年にご卒業、大阪大学大学院文学研究科国史学専攻に進学され、一九七二年に博士課程を修了されました。

そのご東山高校・華頂短期大学等の講師をへて、一九七四年に佛教大学文学部史学科に奉職され、専任講師・助教授をへて一九八五年に教授に昇任されました。以来、今日にいたるまで、学部・大学院において学生や院生に対し、厳しくもあり、温かさもある、情熱にあふれた指導をされ、学生の人気を集めてこられました。その一方で古代仏教を中心とする数多くの論考を世に

問われ、研究活動においても優れた成果をあげられ、一九九一年には「日本古代仏教制度史の研究」で佛教大学から文学博士の学位を授与されました。

同時にまた佛教大学の発展と充実に也大いに貢献されました。一九八九年に学生部長に就任されたのを皮切りに、教学部長四年、事務局長二年、副学長二年、また兼務ではありますが、通信教育部長四年と、学内の主要な役職をつぎつぎと歴任され、一九九九年からは佛教大学の学長として、二期六年間その激職を勤めあげられました。ときに文科省の大学政策が大きく転換した時期にあたり、それに相応する大学づくり、大学改革のために大奮闘されました。さらに学長退任後は、二〇〇五年から四年間、華頂女子中学高等学校長として系列校の運営や経営にも尽力されました。

一方、先生の学問研究を大きく振り返って見ますと、その第一は、日本の古代仏教史の解明に努めてこられたことです。とりわけ奈良時代の仏教には道慈に代表される国家仏教と行基に代表される民衆仏教の潮流が存在していますが、国家仏教と民衆仏教は常に対立関係にあるのではなく、相互に交流しあった相即的側面を考えること、そのことは仏教思想と神祇信仰の関係にもあてはまり、それをふまえて神と仏が集合していくメカニズムや、仏教を核とする諸信仰が融合して日本宗教の原形がつくられたことを明らかにされるときに、神仏習合を仏教の日本化という観点から考えることなどを提起され、その成果は『日本古代の仏教と民衆』（一九七三年）の刊行にはじまり、『日本古代仏教制度史の研究』（一九九一年）、『行基と古代仏教』（一九九一年）となって結実しました。

二つ目は日本と朝鮮、さらには東アジアの仏教交流史への取り組みです。そこでは次のような課題の解明をめざされました。朝鮮の古代仏教に関する断片的な史料を国家史や社会史の視角から照射することで、日本の古代仏教に最大の影響を与えたと考えられる朝鮮仏教の諸相を浮かび上がらせたこと、これらを通して古代においては、日本もそうですが、朝鮮の仏教受容も、当時の東アジアの国際情勢と密接に結びついていたこと、国家と仏教の密接な関係は、これは古代に限られた特殊な歴史事象ではありませんが、国家が主体的に受容することで初めてその国に仏教が定着したこと、言い換えるならば国家史の立場から見た仏教史をさらに深化させる必要があることなどを提起され、その成果は『朝鮮と日本の古代仏教』（一九九四年）、『奈良仏教と東アジア』（編著、一九九五年）として刊行されました。

三つ目は、二〇〇三年から佛教大学の附置機関アジア宗教文化情報研究所（現宗教文化ミュージアム）における研究プロジェクト「法然上人絵伝の基礎的研究」に始まりまず一連の法然上人伝の研究です。近年様々な角度から法然上人像を描くことで人

間法然上人にせまる試みが活発になっておりますなかで、先生は、法然上人絵伝の史料を仏教史や歴史学研究の中に位置づけ、人間法然上人の実像を明らかにしようとする試みに挑戦されておられます。その成果は、『法然伝と浄土宗史の研究』（一九九四年）にはじまり、『絵伝にみる法然上人の生涯』（二〇一一年）、『法然上人絵伝の研究』（二〇一三年）となって実を結んでいます。

先生のご業績はこれにとどまるものではありません。以上のような形で、私が先生の偉大な研究を一言でまとめることの無謀さ、それはまたひよっとする大きな誤謬を犯しているかもしれませんが、門外漢のゆえをもつてご寛恕いただければ幸いです。

さいごに、先生がこうした教育や研究、大学・学園でのお仕事を円滑に進めることができましたのは、先生を温かくも、また時には厳しい眼差しで見守ってこられた奥様あつてのことです。奥様に対する感謝の思いもお忘れになりませんように。

古稀の年齢は、「人生七十古来稀なり」の意ですが、平均寿命が八〇歳を超えるご時世にあつては、まだまだ若年の部類でもあります。まずは健康に留意されますとともに、さらなる研究の進展をめざされ、また学園のさらなる発展のためにご尽力いただきますよう切望して、開会の挨拶および先生のご紹介を終えさせていただきます。